

虚空を映し出す大きな瞳——一九七〇年代の沢田研二論

磯 前 順 一

はじめ

二〇一二年度から二〇一四年度にかけて、日文研において共同研究会「昭和四〇年代日本のホビュラー音楽の社会・文化史的分析——ザ・タイガースの研究」を主催した。その成果として、『ザ・タイガースの再結成にあわせて新書『ザ・タイガース 世界はボクらを待っていた』（集英社、二〇一三年）などを刊行したが、その関心はタイガースが活躍した一九六〇年代前半に主に注がれた。その時代は「昭和元禄」と呼ばれた高度経済成長期にあたり、ロック音楽を通して若者の反抗もまた希望に満ち溢れたものであった。しかし、学生運動の挫折などから、その後の時代主潮は一九七〇年代の「シラケ世代」へと移行していく。私がソロ歌手として活躍していた沢田研二に出会ったのもその時期であった。当時の私にとって、タイガースは失われた黄金期へのノスタルジアを誘う夢であり、沢田研二は乾いた同時代を生きる旗手であった。

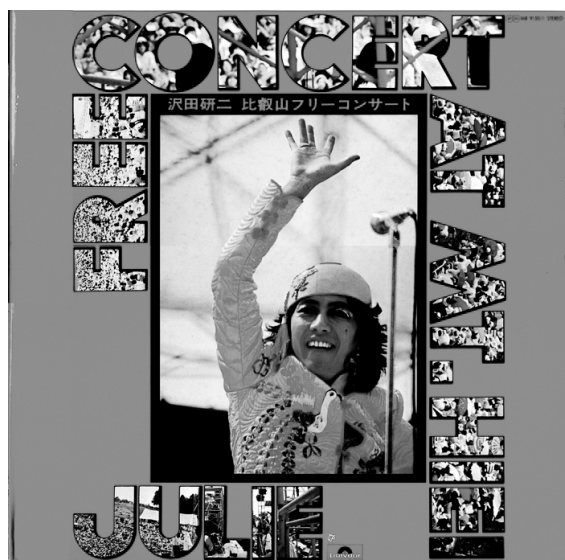
そうした一九七〇年代の沢田研二について語る機会を得たのは、日文研の同僚である細川周平氏がデイクス・ジョッキーをつとめるKBS京都のラジオ番組「レコ室からこんばんは」の二〇一四年三月三日分の放送であった。この番組はタイガースおよび沢田研二のファンの方たちの関心を少なからず呼んだが、周波数の関係から京都府外で聴くことの困難な幻の番組となった。以下、ホップ・スターとしての表現者、沢田研二の魅力をめぐる細川氏と磯前の対話

の部分で文字に起こして紹介することにした。

番組より

【細川周平】今聴いているのは沢田研二のLP『比叡山フリーコンサート』、一九七五年七月二〇日、比叡山のスキー場でのコンサート二枚組ですね。一曲目はこれから「夢のつづき」を磯前さんにリクエストしていただきました。沢田研二作詞でミッキー吉野作曲ということですが、このコンサートのころのジュリーについて、少し話してもらえますか。

【磯前順一】私は中学生だったんですよね。ちょうどこれは、沢田さんが「危険な二人」とか「追憶」という一つのピークを迎えた時期に出したものです。沢田さんがたぐいまれな美青年と言われ、すばらしい歌声で。バンドは井上堯之バンドとミッキー吉野グループ、後のゴダイゴですよ。このバンドがバックアップして、音として



も声としても本当にひとつの絶頂をなすアルバムだと思います。このコンサートの頃、彼は『悪魔のようなあいつ』という三億円犯人の主演テレビをやっていたんですね、久世光彦さんの脚本で。「時の過ぎゆくままに」を歌いながら、長髪で細身の姿で、見た目にも本当に素晴らしいポップシンガーという感じでしたね。

【細川】二曲目はビー・ジーズの「トゥ・ラブ・サンバディ」。レゲエのアレンジでしたね。一九七五年でレゲエというと、相当とんがっているという感じですか。レゲエは、「太陽を盗んだ男」の中でも歌われているそうですね。

【磯前】沢田研二さん主演の「太陽を盗んだ男」で、原爆が完成したと言って、ボブ・マーレーの曲で踊るという印象的なシーンがあるんです。私はあの映画を見て、沢田研二はなんて大きな空虚さを心に抱えていて生きているんだけれど、それが原爆を持つことで自分に生きる意味を与えるようにしているところに強い衝撃を受けたんです。ちょうど七〇年代の半ば、シラケ世代を象徴するジュリーやショークンというP.Y.G出身の二大ボーカルが時代の空気を見事に体現していた時期ですよ、その彼らがシラケ世代の空虚さをどうやって埋めるのか、どうやって心の空虚さに立ち向かうんだろう。そうしたファンの思いを投影させるようなキャラクターが、この比叡山コンサートから『太陽を盗んだ男』にかけて、沢田研二が確立していたものだったと思いますね。

【細川】ATGの映画だと、桃井かおりとか石橋蓮司というのも、僕はちょっと思いつくんですね。

【磯前】桃井かおりといえば、萩原健一と『青春の蹉跌』を七〇年代冒頭に作りましたね。その映画音楽が、ジュリーのバックバンドを勤めた井上堯之さんなんですよ。ジュリー、

ショークン、井上堯之、こういう人たちが青春の空虚さ、七〇年代のポストGSの「どういふふうに自分たちは生きたらいいの」という空虚さを、彼らの映画やこの比叡山コンサートではうまく表現されていたような気がしますね。

【細川】三曲目はちょっとそれに関連する詞になるのかな。ジュリーが作詞をして、元スパイダースの大野克夫が作曲をした「残された時間」、この中で歌詞がすごくいいんですね。「考えているより、歩き出したほうがいいということだけは、僕たちはわかるよ。たとえそれが命とかけっこだとしても、青春はひたすらに生きることさ」——これをジュリーが七四〜七五年につくって歌っているわけですが、今、磯前さんのシラケ世代の話を聞いていると、この歌詞がものすごくぴんときますね。

【磯前】ジュリーがすごいのは、「大きな目が虚無を映し出す」とよく言われていましたけど、ただシラケているんじゃないくて、それを超えていく情熱を、歌とかそういうものを信じることで、シラケているものを一生懸命生きて超えていくというメッセージを、歌やお芝居に向かう姿勢から自然と発していた点だと思うんです。だから子供だった私にさえ、沢田さんがすごく輝いて見えたのだと思います。

【細川】この次に聴いてもらうのは、「花・太陽・雨」ですけど、これはどういう由来なんですか。

【磯前】「花・太陽・雨」は、ここのギターをやっている井上堯之さんとキーボードの大野克夫さんというスパイダースと、タイガースから沢田、岸部の二名が加わって、ショークンたちと一緒にやったGSのスーパーバンドですね。そのファーストアルバムで、私はこれを聴いたときにとつもない衝撃を受けたんです。程なくして、井上さんが「これはアルベール・カミュ

の『異邦人』をモチーフにつくったんだ」とコメントしたのを聞きました。さっきのシラケ世代と関係するんでしょうけど、ここで歌っている「喜びのときに笑えない」とか、自分のむなしい人生をどうやって満たしたいんだ、そこに花とか太陽とか雨という恋人の愛情が入ってきて光が差し込むという歌で、カミユの不条理の世界を超えて、何か生きる意味を探そうという、すごい肯定的な歌だったと思いますね。

【細川】確かに、曲名で「花がいっぱい」だの、「太陽がさんさん」だの、そういう歌謡曲、GS曲は思いつくけど、三題くつつちゃって、何ていうか、文章にしないで並べちゃうというのは、やっぱり特別な作詞法だね。岸部修三、現在の岸部一徳の歌詞ですね。

【磯前】これは、色のない世界に花が咲く、何もない世界に太陽が輝く、乾いた土地に雨が降る、そういう意味のない世界に意味をもたらしてくれるのがあなたの愛だという歌で、そのもともなったアイデアを井上堯之さんが持っていて、彼は伝記の中で「ずっと自分が生きることにってむなしくて、苦しくて、スパイダースやってもむなしかった。音楽やっても意味がなかった。そこを音楽を通してぶつけてみようということで作った」と言うんですね。そのときに沢田研二に出会って、「沢田というのは一生懸命とにかくやる、何でも一生懸命やる。それは、エンターテインメントでも芸能界でもコントでも、何でもやる。歌もやる。そういうやることに意味を見つけようとしている沢田にこの歌を歌わせたい」と、井上さんは感じていたみたいですね。

【細川】空っぽということで、ジャックス、六八年か六九年にグループサウンズとしてデビューしたら、その次のニューロックの人たちに支持され、今も非常にファンは広い。ジャックスが「からっぽの世界」というのを歌っていますね。早川義夫、今も活動していますけれども、彼

の場合も「からっぽの世界」で閉じていて、雨とか潤いということは一切ない世界ですね。それが、沢田研二なり岸部修三の世界、あるいは井上堯之だと、そこに何か力をもたらしにくれるというわけなのか。なるほど。

【磯前】それがちよつとGSっぽいと言えは、救いがある分GSっぽいし、早川義夫のように救いがないから救われる人たちもたくさんいるんですけど、沢田研二や岸部修三が描いたのは、そこに色が入ってきて、雨が潤って、救いが。おそらくそれが、PYGを聴いた男性聴衆にはきれいな過ぎちゃうし、GS時代からの女性ファンはいささか観念的過ぎたでしょうね。

【細川】難解と言えは難解じゃないですか。その前のGSのダンス・ナンバー、シーサイドバンドだとか、いわゆる踊ってキャアキャアしているファンにとっては、PYGというのはどうなんですか。

【磯前】これは、ベスト三〇に入ったか入らないぐらいですから、見事にセールスとしては大こけたんですね。今おっしゃったように、まさに難解過ぎた音だったんですね。でも、比叡山コンサートで私が子供心に感じたのは、沢田研二の意地だったんですね。PYGは成功しなかったけど。そして、この比叡山コンサートで、「危険なふたり」とか「追憶」で当たりに当たっている沢田研二は、PYGを歌わなくてもよかったんですね。でも、あえてPYGをここにもってきた。自分たちのやりたかったのはこれなんだよ、今も変わらないんだよというふうに。彼のすごい熱いものを感じましたね。「ただのアイドルじゃないんだ、この人は」と思いましたね。

【細川】では次に、この二枚組のアルバムの一番最後に歌われている「叫び」というのをリクエストしてきましたけれども、この曲の由来をお願いします。

【磯前】 比叡山コンサートのアンコールでしたね。一度バンドが引っ込んで、沢田さん一人だけがギターを片手に出て、自分で弾き語りをして歌うという印象的な風景でした。デヴィッド・ボウイが「自分はいつかステージの上で殺されたい」とスターとしての覚悟を歌っていたけど、それを思い出させるような沢田さんの歌詞で、「歌いたい自分のために、声がかれるまで」、そして「いつか歌を枕に死にたい」というんですね。それを聴いて、沢田研二の歌手としての覚悟というんですか、自分は表現者なんだ、歌を歌うということに人生を見つけて、そして人生はそれで終わると、この人って、歌うということに生きることそのものの意味を見出しているんだな。それが理屈じゃなくて、一人ぼっちの弾き語りの演奏の中に見事に体现させていたのが凄い印象でしたね。だからでしょうかね、私は沢田さんのライブ・レコードの中ではこの歌が一番好きなんです。

【細川】 どんな歌詞か、少し読んでもらえますか。

【磯前】 「振り返ることは好きじゃないから、ただあしたのことを思って生きよう。みんなにしてあげることはひとつも見つからないけれど、歌なら歌える」「歌いたい自分のために、歌いたい声がかれるまで。死にたい、いつか舞台で、死にたい、歌を枕にして」——こういう歌詞なんですね。私は子供でしたけど、これを聴いたときに、自分も何か表現できるものを人生の中でつかみたいと思ったんですよ。実際にはその後一五年ぐらいたって三〇歳前後になってから、物書きになろう、そのために大学院で勉強しようと思うようになるんですけどね。これを聴いたときに、子供ながら、やっぱり何かに賭けて自分で意味を見つけていく、それが表現という行為なんだろうと、漠然たる思いながらも強い衝撃を受けたんです。その表現行為が音楽なのか、物を書くことなのかは、まだ子供だったから何だかは分からなかったですけれど。で

も、そうしたことを考えさせてくれた稀有な機会だったですね。おそらく、このときのコンサートのために沢田さんが用意した曲だったんじゃないのかな。このコンサートは沢田研二にとっても特別な時間、ファンへの贈り物であり、彼自身の中でも大きな道標をなすものだったと思っています。

おわり

今だけの学者が自分の学問が社会の不正さを糾すために役立っていると信じているのだろうか。生活の糧を得るためという理由のもとに、どれほどこうした生活を続けていったらよいのか、経済的に潤っていたにせよ、暗澹たる気持ちになっている研究者が大半なのではないのだろうか。もはや学問の真理を信じられない状態は、かつて沢田研二あるいは萩原健一が活躍した一九七〇年代のシラケ世代に共通するようにも見える。

しかし、かつてのシラケ世代がそうした真理の喪失を恥じる気持ちを意識化して、言葉にしていたのに比べると、今の社会状況はそうした真理の喪失状況そのものを認めず、みんなदैよってたかって存在していないかのように否認しているようにも思える。だとすれば、かつてのシラケ世代がジュリーやショークンという時代の旗手を生み出したように、何か文化的あるいは思想的な象徴を作り出すのはきわめて困難な状況にあるように感じている。こうした危険な状況だからこそ、沢田研二という歌手に軌跡に今改めて着目していきたいと考えている。少なくとも、彼が表現という行為に一身を賭した真摯さを学ぶことは、その成果は別として私でも出来ることだろう。

(国際日本文化研究センター教授)